ガロ
1992 7
1964年11月10日第3種郵便物認可
1966年4月5日国鉄首都特別扱承認雑誌2343号
1992年7月1日発行第29巻第6号通巻330号
（毎月1日発行）
林静一の華麗な世界
ロングインタビュー
『まっかっかロック』
あがた森魚
安彦麻理絵
内田春菊
佐々木マキ
高橋克彦
ひさうちみちお
やまだ紫
四方田犬彦
『Z CHAN』刊行記念
井口真吾
Z テキスト
近藤ようこ
根本敬
鳩山郁子
沼田元氣
みうらじゅん
QBB
唐沢商会
みぎわパン
ねこぢる
三橋乙揶
440yen
CARTOON: SEIICHI HAYASHI PHOTO: HITOSHI IWAKIRI DESIGN: KEN'ICHIRO HARAGUCHI

月刊漫画ガロ No.330 1992 7

1966年4月5日国鉄首都特別扱承認雑誌第2343号
1964年11月10日第三種郵便物認可
1992年7月1日発行（毎月1回 1日発行）
第29巻第6号 通巻330号

編集人 山中潤
発行人 山中潤

〒101 東京都千代田区神田神保町1-62
☎03(3291)9556・2495 FAX03(3292)7368
郵便振替・東京0-135477
株式会社 青林堂

林静一の華麗な世界

1992 7 青林堂

zeit 雑誌02511-7 定価440円（本体427円）

月刊漫画ガロ7月号目次

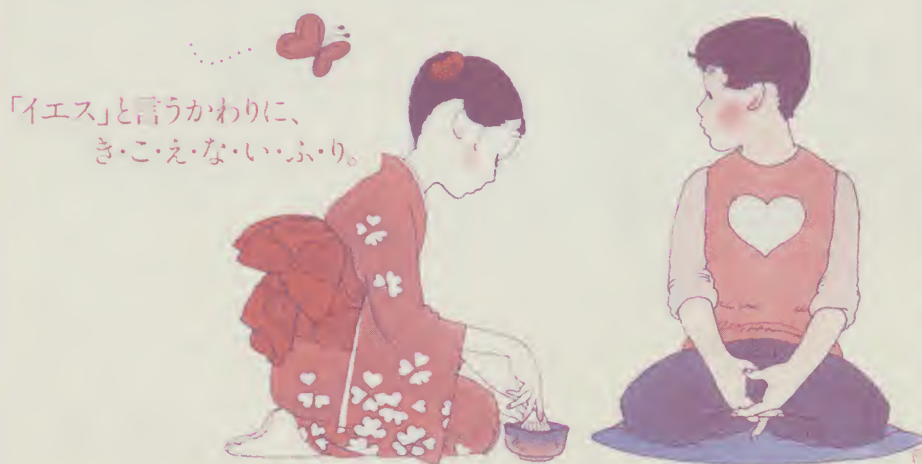
表紙イラスト●林静一　目次イラスト●知久寿焼
表紙フォト●岩切等　表紙デザイン●原口健一郎

ファンの熱いラヴコールに応えて甦る珠玉の一冊――
透明通信
鈴木翁二著
■A5判上製■定価1500円■
それはいつだって
ひそかな愉しみを
少年の熱っぽい心に
約束してくれました――
7月2日発売予定
青林堂

特集

林静一の華麗な世界

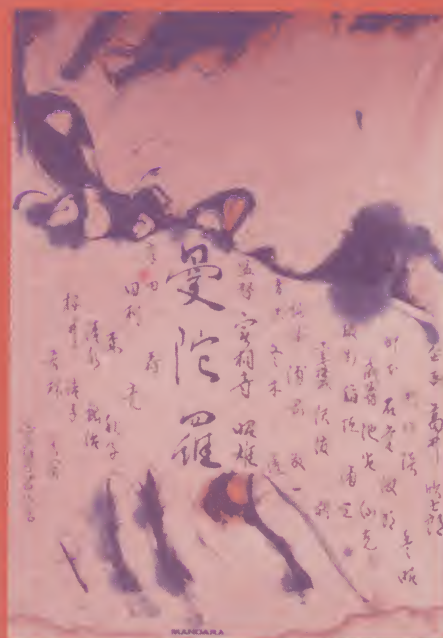
●ロングインタビュー●証言・林静一・あの頃●名作劇場⑥「まっかっかロック」

●本文二色図版／㈱サンリオ1983年刊『林静一の世界』より

雨あがり

劇場ポスターより

夢盗人

主婦と生活社「ジュノン」より

とおり雨

『昭和の浮世絵師』だね。

長井勝一

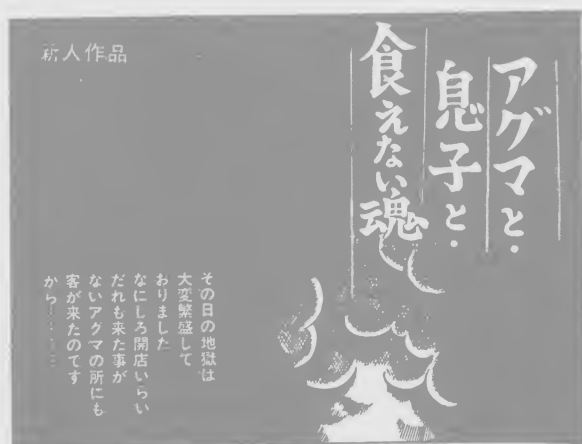
■林君が持ち込みに来た時は…青林堂が「航空ファン」の二階にあった時だから…忘れちゃったよね。最初の作品は駄目だったんだよね。悪い、っていう訳じゃないんだけどさ、載せられないじゃない、あんまり長いと。確かそれで最初駄目になったんじゃないかな。向こうは初めてだったからさ、ずいぶん気にしたみたいなんだよな。でもこっちは友人になっちゃったけど、来る人は皆同じだからね（笑）。最初の印象ってのは、作品見る力と見られる方じゃ立場違うしね。この先長く付き合うかどうかは後から何回も会って作品見てくうちに知ってくもんだからね。最初会った時はこうでしたよ」なんて言ってるのさ。あれ相当いんちき言ってるんじゃないかと思うよね（笑）。最初会ってから、二回目、三回目、と重ねていくうちに覚えて行くもんで、最初会うときは、仲間じゃもんだから、人より作品の力を先に見ちゃう。

■…入選はあれだろ、『アグマと息子と食えない魂』ね。絵の印象ってのはやっぱり「上手いな」と思ったよね。聞いたらアニメーションやってる、っていうんだけど、その頃はあんまりね、こっち自身がアニメーションの具体的な製作過程って判らないからね、こっちは劇画ばっかり見てるでしょ、貸本時代からずーっとね。そういう中ではすごく新鮮だったよね。「何だろう」と思ったよね。新しいんで。（佐々木）マキさんなんかもそうだよね。そういうものってのはやっぱりね、外国もの見たり、アニメーションに関わった人ってのはどこかバタ臭いというか、ディズニーっぽいというか、そういう感じするわけだけど、そうじゃなくて全然そういうものに関係なかった楠勝平なんかはバタ臭さは無いもんね。

■…それから青林堂がキンカ堂の上に移って、『赤色エレジー』はその頃じゃなかったかな。で、あがた（森魚）に安部慎たちが「唄え」って言ったんだよ。であがたが「ギターが無いから唄えない」って言ったら「取って来い」って言ったんだよ。で取りに行ったよ、雨ン中。それであがたさんは、ギター弾いて唄った訳だよ、タダで（笑）。そしたらあいつら酔っ払ってるもんだから、足踏みしてバンバン浮かれた訳よ。そしたら下の人が「寝られない」って（笑）。…『赤色エレジー』は、林君が「長編描きたい」ってんで、下宿みたいな賄い付きのを探してくれないか、って言うんだよね。俺千葉にいた事あるからね、知り合いの出入りのおばさんがね、息子一人いたんだけどもう東京行っちゃって部屋空いちゃってる、っていうんだよね。で話したら「いい」っていうからさ、よく聞いたら「蔵の二階」だっていうんだよね。でもこっちはそんなの全然構わないからそこ借りて、そこで『赤色エレジー』描いたんだと思うよ。原稿そこまで取りに行ったんだよね、勝浦の先の。俺が居た病院の少し先の方。

■ただあの人すごく呑気ね。俺それ知らなかったんだけど、会いに行くと何か落っこってんだよね。これ札じゃないかな、って思ったら札を折り畳んだのを放っぽってあるんだよね。「これ落っこってるよ、大丈夫か」って言ったら「こないだも下宿のおばさんに注意されました」って言うんだよ（笑）。…そこへは滝田（ゆう）さんも遊びに行ったと思うんだよね。滝田さん何日か居たんじゃなかったかな。あと上総港の（白土）三平さんのとこへ勝又さんや皆で行った事もあったね。そういやその頃俺木造二階建てか何かで一部屋だけ、ってのあるじゃない。二万円ぐらいだったかな。一ヵ月。ただ年間通して借りなきゃならなかったけどね、そこ借りて時々皆で行ったりしてたんだよね。三平さんなんかまだ上総港にアパート借りない時はそこ行ってたんだよ。で林さんも勝又さんも滝田さんも来てたんだよ。今と違って貧乏は貧乏なりに集まって、旅行行ったりしてたんだよね。

■横浜に大谷君（谷弘児）が居ただろ、で中華料理皆で食いに行くから「店探せ」ってね、桜木町の駅にお昼に集まる事になって、来ないんだよね、林君だけが。待っても待っても、二時間待っても来ないんだよ。皆が何回も来る訳。「長井さんもう来っこないんだから、皆待ってるし始めよう」って。でも俺も「あの人遅いんだから」って、こっちもどこの店、って決めてなかったから落ち度もあるんだよね。で二時間くらい待ったかな。そしたら来たよ。普通の顔して（笑）。確かあの時お母さんが行く、ってね、『この着物がいい』とか『似合わない』とか言い出して、『行かないのか』って言うと『行く』って。でまた違う着物出して…ってなったから、もう皆に会えないなら会えないでいいから、せっかく来たんだから親子で中華料理でも食って、と思ったんだけど、長井さんが待ってたとは思わなかった」って（笑）。

■やっぱり彼のお母さんも書で食ったくらいだから、割合芸術感覚ってのは備えてるんだろうね。最初の頃の題字なんかはお母さん書いてたもんね。もちろん林君も後からどんどんうまくなって自分で書くようになったけど。それと、あんなに絵がうまくなるとは思わなかったね。特に日本画の方にも行ったでしょ。「昭和の浮世絵師」だもんね。今あれだけ描ける人ってそういないよね、何人も。俺は具体的にアドバイスした、って事はあんまり無いしね。

■入選作品／『アグマと息子と食えない魂』月刊ガロ昭和42年11月号掲載

■林君のお母さんってのは、やっぱりどこか普通の人とは違って…浮き世離れしてたね。いいとか悪いじゃなくて、時間の感覚とかがね。大陸に長くいたからじゃないかな。中国人なんてさ、汽車が何時に来る、なんて気にしちゃいないでしょ。遅れようが何しようが。日本人は「何時何分」っていやあちゃんと発車するし、到着するし。そういう感覚じゃないからね、満州なんてのは。そういうところではそういう時間感覚じゃ生活出来ないよね。

■やっぱり林君の作品で一番印象に残ってるのは『赤色エレジー』だね。当時としては珍しく長編だったし。単行本もすぐ売れて再版したしね。あがたの曲がヒットして相乗作用ってのもあったし。あがたも漫画見て曲作るほどインパクト貰ったでしょ。だから若い人達に与えた影響ってのは俺たちより凄いんだと思うよ。今より裕福じゃなかったでしょ、男の子も女の子もどこかハングリーだったしね。その後だよね、上村さんがやったのは（『同棲時代』）。あの人も立派だよね、自分で二番手をやる、って宣言したからね。俺とか林君とか高野さんなんかを招待して一杯呑んで、「二番手をやる」って宣言して。それが『同棲時代』だから。…それにしても上村さんもしたたかだよ（笑）。何も言わなきゃ「ありゃ『赤色エレジー』の二番煎じじゃねえか」って言われるけど、言われる前に「俺は二番手をやる」って宣言しちゃうんだから。「俺はもともと二番手が得意なんだ」、「俺なりに咀嚼して俺なりの作品を発表出来るんだ」、と。それで今度は本格的に「同棲時代」っていう言葉が流行ったんだからね。

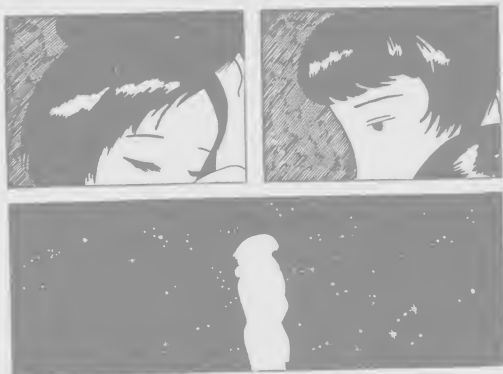
それはやっぱり林君の『赤色エレジー』が凄いから、「俺もやりたい」と思ったんだよね。「俺なりの絵とストーリーで展開してみたい」ってのがあったんだろうね。作品も全然違うしね。どっちも一世を風靡したよね、どっちも曲が出来てどっちも映画になって。

■割合皆青林堂に遊びに来てたよね。一時期ふみちゃん（佐々木マキ夫人）が青林堂で働いてた時もね、マキさんも林さんもね。勝又さんも年中来てたし、返品なんかあると皆で運んでくれたり、手伝ってくれたこともあるよ。今と違って若い連中が溜まり場っていうか、よく集まってたよね。それも翁二とか安部慎とか、あれまでが続いて、それ以後はあまりないよね。松田とか上野さんとか桜井さんとかよく来てたし、林君も何気なく遊んでったり。滝田さんなんかは俺と近い呑み方、縄のれんとかね。林君になるとちょっとモダンていうか…モダンってのも変だけどね、バーとかスナックとかみたいな方がすきだったよね。ゴールデン街もよく行ってたよ。いつもって訳じゃないけど。とにかくいい時代だったんじゃないかな。銭には不自由してたけど（笑）、日本の勃興期だから。今は銭には不自由しないけど、「不安の時代」なんじゃないの。あの頃は一途だったから。だから別に漫画描けたから儲かるとか褒められるという時代じゃなかったでしょ、林君の頃までは。その後だからね、「漫画家」ってなったのは。それまでは「漫画屋」だから。三平さんがよく言うように世間に認めてもらった訳じゃない、と。

■こないだお正月に送って来たろ、封筒で。年賀状。あれを額に入れてしまってあるんだよ。やっぱり見ると「上手いなぁ」って思うよ。見事だと思う。とてもじゃないけど他のと一緒に積んどけないでしょ。もう「漫画家」じゃないよね。日本画に近いんじゃないの。だからこないだの『グッピー…』なんか見ると冒険じゃないか（笑）と思っちゃうよね。

（談）

東京・阿佐谷の自宅にて

『赤色エレジー』より

夢二をやめた人

四方田犬彦

ぼくは、林静一の作品を彼が「ガロ」でデヴュウしたときの『アグマと息子と食えない魂』のころから読んでいる。書きだしたころの彼の、一作一作にまったく別の文体と意匠を用いてゆくさいの速度というものには、目を瞠るものがあった。ある種の元素は核分裂をとげるとき、最初の数十分の一秒で矢継早に次々と別の元素へと変化してゆき、あとはゆっくりと時間をかけて変化してゆく。林静一の初期にもにたような現象があったような気がする。

『赤色エレジー』のころに入って、ようやく時間の流れが緩やかになったという印象をもった。ただ作品の内側に流れている時間感覚は非常に複雑である。結始する、しないをめぐる際限のない停滞感、つまりドラマの圧倒的な不在を、林静一はよくぞ画面に定着させたと思う。

その少し前だったか、新宿伊勢丹の前にATGの小屋があって、林静一の短編アニメがなにか本編といっしょに上映されたことがあった。観客席は上映の間中ずっと静かだったが、エンドマークが出た瞬間に誰かがカン高い声で「わからない!」と叫んだ。とたんに観客席がどっと湧いた。一九六〇年代というのは「難解」が芸術を計るひとつの尺度だった時代である。これはその最後を飾るエピソードだろう。その後は誰も林静一を「難解」と呼ばなくなった。「可愛い」とか「ステキ」というようになったわけだ。

小梅ちゃんはもう少しのところで林静一を第二の夢二に仕立てあげかねなかった。彼が沢田研二のかわりに鈴木清順のフィルムで主演していれば、傑作だったと思う。いたるところに彼の描く少女のイラストが氾濫し、「記念切手にまでなった。けれども林静一は、なれたらなれたであろう国民画家の途をあっさり放棄してしまった。自分の財産を放棄することが、それを築きあげることよりも実ははるかに難しいと知っている人は、そう多くはない。だが、彼は抒情的な少女絵を脇において、『pH4,5グッピーは死なない』の陰惨なハードコアの世界へ突入していった。これはラディカルなことだと思う。食足りて愚かしくなる、そこいらの作家とは筋金の入り方が違っているのだ。

林静一は、たぶんまだ本当にスゴイのは公開していないのではないかと思うが、相当に枕絵、危な絵の類を描いているんじゃないかなと思う。本来あの手のものはこっそりと内々で見るのが面白いわけで、今度会ったらぜひ見せてくれるよう、頼んでみよう。

特集・林静一の華麗な世界

林静一インタビュー

SEIICHI HAYASHI INTERVIEW

——今回は「ガロ名作劇場」と合体させた特集という事で、林さんのルーツをいろいろと掘り起こさせていただこう、と……。

林　「過去は振り返っちゃいけない」とよく言うよね（笑）。

——最初にそう言われちゃうと終わっちゃうんですけど（笑）、主旨としてはあくまでも後ろ向きなのではなく、「温故知新」という意味で…。

林　「後ろを振り返っちゃいけない」、「愚痴をこぼしちゃいけない」、朱子学にあるんだ（笑）。

——ええと（笑）、現在の「ガロ」の足場を確認してこそ未来もある訳ですし、その点をご理解頂いた上で（笑）いろいろとお話を伺いたい、とそういう事でひとつ宜しくお願いします。

林　はいはい（笑）。

■旧満州から引き揚げて…

——林さんは大陸でお生まれになったんですよね。（※中国東北部…旧満州）

林　そうですそうです。

——引き揚げた、というか、こちらに戻られたのはやはりずいぶん小さい頃ですよね。

林　そうですね、昭和二十二年だから、僕が二才の時だから。

——じゃあ全然記憶なんてある訳ないというか…。

林　うん、ないです。

——でもやっぱり向こうが故郷、という気がしますか。

林　さだまさしさんが「関白宣言」を北京で歌って、非常に受けたという外電を新聞で読んだ頃だから、七〇年代の終り頃か八〇年代の初めだと思うんだけど、手塚治虫さんなどと中国へ行ったんです。そこで副首席主催の晩餐会がありまして、円形テーブルに分かれ中国側の方々と会食になったんです。僕のテーブルに東北部の委員長が居まして、通訳の方が僕が東北部生まれだと伝えると、親しみを込めた笑顔を見せて話しかけてきたんです。ところが、隣に座っていた母が何を思ったか「東北部の言葉って汚いんですよネ」って（笑）言ってしまった。

——（笑）言ってしまった。

林　僕は、「日本人ですけどあそこで生まれて、第二の故郷のように思います」って言いたかったのですが母が…（笑）。

——いきなり（笑）。

林　「北京は都会だから中国語は綺麗ざ〜んすけど（笑）、東北部ってのは汚いでしょ、言葉が」だって（笑）。

——いきなりかましちゃった（笑）。で、何も言えなくなっちゃった。

——よくお母さんとは旅行されるんですか。

林　いや中国はね、僕は懐かしがるだろうな、と思って連れてったんですよ。そしたら逆でしたね。やっぱりああいう「引き揚げの悪夢」みたいのが全部こう…、特に王府井のような賑やかな通りを中国人がざーっと歩いてるのを見ると、物凄く精神的に不安定になっちゃって。

——当時を思い出して…。

林　うん、逃げた時の恐怖感とかを思い出してね。

——相当大変な思いをして引き揚げて来られたんですか。

林　うちの母はそうでもないと思うんですよね。う〜ん……。

——向こうでは何をやられてたんで

すか。

林　普通のサラリーマンですよ、父はね。

――前につげさんの『長八の宿』のモデルになった松崎の宿へ行ったら、林さんがお母さんと二人でいらして、ずいぶん長い事滞在されたとか…。

林　いえ三日くらいですよ。母が物凄く気に入ったの。離れに泊めてくれてね、そしたら母が「帰らない」って言い出して（笑）。困っちゃってね、正月だけで来たのに。母にこういうところはいいんじゃないかなあ、と思って…で、やっぱり良かったのね。障子窓に梅の枝が映ってたりして。それで母に「明日帰るよ」って言ったら「え？もう帰るの？帰りたくない」って（笑）。

――林さんはご兄弟はいらっしゃらないんですか。

林　居ないんですよ。

――失礼ですけども、お父さんはお亡くなりになられたんですか。

林　ええ。

――おいくつくらいの時に……。

林　僕が生まれてすぐですよ。姉貴が居たんですよ、五才の。姉貴も親父のすぐ後に死にました。大体あの頃なんてのは…僕も足に凍傷の痕があるんですけど、栄養が、食べ物なかったでしょ。要するに蒋介石が「過去の罪は憎まず」って、日本人は日本人街に囲うんだけど、何となく、ねえ。だから食料が行き渡ってないんですよ。だから衰弱していくんですよ。北満なんてとこから引き揚げて来た人なんて、本土と違って零下何十度でしょ。夜はね。だからそこで死んじゃうんですよ、家がないから道路でね。

――すいません変な事を聞いて…。

林　いえ。

――じゃあお父さんが亡くなられたのは、日本が負けて、引き揚げるまでに…。

林　そうです。「戦病死」ですよね。引き揚げる時に骨を持って帰ってきましたから。姉も相次いで亡くなってるんですよね。

――日本はどちらに引き揚げられたんですか。

林　結局あれは舞鶴で…あの当時は入水路にバラックみたいなのが建っててそこで何日か過ごして、身元が確認されると内地に引き揚げるんですよ。それでたぶんすぐ実家、千葉に戻ったんだと思うんですよ。

――ご実家は千葉なんですか。

林　千葉なんですよ。僕も全然知らなかったの（笑）。

――その後はずっと千葉にいらしたんですか。

林　いえ、たぶん…僕が三、四才だから、二年くらい居たんじゃないですか。それで中野で親戚が学校の校長をやってたもんで、そっちへ移ったの。今ブロードウェイがあるんだけど、あの辺なんですよ。だからブロードウェイって凄い早いんですよ、僕が中学の時からだからね。

――そんなに古いんですか。

林　そうなんですよ、考えてみたらね。

――でも相変わらずセンス的には古いですよね（笑）。竹の針でレコードかけるクラシック喫茶とかありました？

林　どの辺にあるの？……でも中学生くらいまでは居たのが。子供だから、子供の見る世界と違うからね。プラモデル屋とか。今早稲田通りの方に抜けてるでしょ、昔はあれ抜けてなくて突き当たると「花見煎餅」があったの。で迂回すると東映の映画館があって…あれはこないだ行ったらまだあったね。東中野の方へちょっと行くと国鉄官舎があるでしょ、あの辺から線路に入れるんですよ。で線路の上に釘を置いて、電車がバーッと通るとね（笑）。あれで真ん中こうして（笑）十字手裏拳作ったりしてね。僕らの頃は自転車が無いと駄目で、自転車で徒党を組んで、内越町と喧嘩するんですよ。僕たちは囲町だから（笑）。

――けっこうガキ大将だったんですか。

林　いやああいうものは年代で引き継いでいかなきゃいけないから、ボスになってかなきゃならない。六年生が自分一人だと、下のを全部引き連れて行かないとならないのね。そうしないと塾行く時に他の地区通った時にやられちゃうでしょ（笑）。

『せつないタタミの目』

安彦麻理絵

私は、せつないものが好きです。悲しいものとか元気なものも、なかなか好きなのですが、でも一番好きなものは、せつないものです。林静一さんの漫画を読むと、その、私の大好きなせつなさを味わえるので、ソレを体で感じたくなった時は、林静一さんの漫画を読みます。でも、不思議だなーと思うのですけど、林静一さんの漫画って、読んでいてせつなくはなるのですが、涙ってやつは、なぜか出てきませんのです。なんでかなーと考えてみたんですが、その思いあたるフシはとゆうと、林静一さんの漫画って、せつないくせに凄くヒワイな感じがするからでしょうか。不思議です。でもソコがカッコイイと思います。読んでトッテモセツナクなってんのに、ソノ気にさせといて、でも凄くヒワイだからお涙チョーダイにはなってないところがなんかとってもニクタラシくってイイんです。あと、登場人物のたれさがった首のうなじや丸めた背中にいたる、一本一本泣いているような線が私はたまらなく好きです。ソレを見てると文字通り胸がきゅうーんとしてしまって、ああ〜〜〜となってしまい、ますます私はせつなさのとりことなり、「せつなくてヒワイ」とゆー快楽の境地からぬけられなくなってしまうのです。「せつなくてキモチがイイ」とゆうのはキモチがイイものの中でもとりわけキモチがいいと思うので、ソレを知らない人を残念ねぇと私は思ってしまうくらいです。それと「タタミの目」です。私はタタミが出てくる部屋の絵がとても好きなんですけど、「せつないタタミの目」をかける人って、やっぱり林静一さんをおいて他にいらっしゃらないのではないでしょうか？林静一さんの漫画にでてくるタタミの目をみてると私はせつなさにゾクゾクしてしまいます。私も漫画の中によくタタミを用いますが、「せつないタタミの目」とゆーのはやはりかくのがとてもムズカシくて非常にアレで困ってるしだいです。

■「教育熱心」なお母さん

――林さんは一番最初に絵とか漫画に入るきっかけというのは何だったんですか。林　うーん…絵の塾は通ってたんですけどね。

――「絵画」の塾ですか。普通あの頃だと算盤とかそういうもんですよね。

林　算盤もやらされましたよ。

――わりと教育熱心なお母さんだったんですね。文化色の強いというか（笑）。

林　（笑）そうねえ。

――亡くなられたお父さんが絵が好きだった、とかいう事はあったんですか。

林　…うちの親父は京都の大学出てるんですよ。母に聞くと戦争終わったらお前と二人で京都で和菓子屋やりたい、て事を言ってたらしい。だからそれ聞いて、絵心が無い訳じゃねえなあ（笑）、と思って。和菓子ってほら、形作ったりという意味でね（笑）。いやあのね、僕が母にすごく興味持ってるのは、サイン会とかで大阪地区行くと、今でも「お母様の結婚式のときの写真持ってます」っていう人がいるの。自分の親が何か関係があるんだね。で、何で関係あるのか判らなくて。そうしたら、千葉県史に出てくるのね、母親の方は。一地方の豪族みたいなものですね。で、母が言うには林家はもう少し格が低い、って（笑）。格が低いのにお見合いでおじいちゃんが一緒にさせた、って。

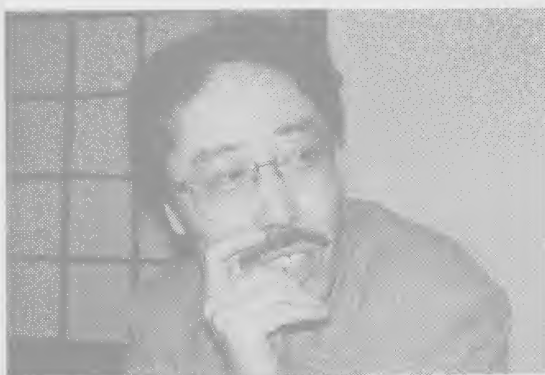
――お母さんのご実家の方は戦後痛手というか、戦前と戦後ではずいぶん変わられたんですか。

林　母方の方は、おじいちゃんが弁護士だったから、弁護するための費用で土地をどんどん切り売りしてったから。

――弁護のために。

林　ええ、貧しい人は弁護費用を出せないでしょう。それで財産潰したと、母は言ってますよ。まぁ母も親の台所事情など、あまり知らなかったんじゃないですか。母の兄弟は○○家のお坊ちゃん、お嬢さんだから。祖父母が終戦時に死んで財産を調べたら、なんにも無かった、ということでしょう。

――じゃあ本当に戦前戦後でガラッと変わっちゃったんですね。

林　そうそう。だから母なんか引き揚げて来て、財産あると思ってたんじゃないかな（笑）。

――小学校の頃に絵を習ってる時は言われるままにやっていた、というか…。

林　いや、あのね、小学校一・二年の頃ってそういう図画工作って何にもやらなかったのね。夏休みの宿題とか何にもやらなかったの。それ見て母が一生懸命やるのよ。で、それ賞取っちゃうの（笑）。

――（爆笑）

林　ひどい時にはね、「切り絵」ってあるでしょ、切り紙でこうやって、それを色紙の上に乗っけて物語を作った紙芝居みたいなのを作るわけね、でそれ持ってったら凄い、って金賞貰っちゃった（笑）。

――それ普通親がやったって思いますよねえ（笑）。

林　思うよなあ（笑）、で、先生が教室でそれやれ、って言うわけ。出来る訳ないよねえ（笑）。…でもそれで面白いのはプライドが出来ちゃうのね。俺はあのレベルをやらなきゃならないんだ、って。あれは苦しかったなあ（笑）。

――後戻り出来なくなちゃった。

林　そうそう（笑）。一時はノイローゼになりましたよ、なんて（笑）。

――（笑）…そうすると本格的に絵に興味を持たれたのは…。

林　絵というより漫画ですよ。漫画は小学校から中学校の頃に…あ、作品集に載ってるけどね。（南）伸坊が「いいねいいね」つって言ってた。「こういう漫画を今描いた方が面白い」って（笑）。中学三年の時にね、何百毎描いたかなあ。

■絵本『おるすにしつれいいたします』（講談社刊・文／森山京）

――本当に「漫画少年」だったんですね。

林　そうそうそう。

――いやでもこれ凄いなあ。今でもあるんですか。

林　うんどっかしまってあると思うよ。紐でこう括って（笑）。二冊描いたのね、長編は。

――パッと見ると手塚治虫という感じですね。

林　そうそう、やっぱり手塚さんだよね。東浦美津夫とね。あ、そうそう、それで小学館に東浦美津夫を復刻しろ、って言ったの。東浦美津夫の舞子さんって可愛いんだから（笑）。あの頃の漫画で特徴的なのは手塚さんも東浦さんもそうなんだけど、こういう風に袴があって

足がこう出てて…こういう親指を描かなかった？
――ああ、ああ。白土さんも最初はこうでしたよね。
林　白土さんもそうだった？あれが異様に気になってね（笑）
――その親指が（笑）。
林　そう（笑）。それでね、クラスの子が手塚治虫さんの原画をお父さんが貰ってきた、てんで見せて貰ったの。そしたら綺麗なんだよね、線がこうスラッ、として。「おおっ！」という感じで。
――それ見て真似をしたりとか。
林　そう（笑）。で、近所の子集めて漫画の週刊誌を作ったの。

■『林静一作品集』
（青林堂1972年12月号刊行）

■母は「芸術家」ですよ

――それから中学を出て…。
林　うん、高校行かなかったからね。もう中学三年の時から母は完全に駄目だったからね。小学六年頃から駄目だったかな。やっぱり「お嬢さん」だから駄目なんだよね。現実にヴァイタリティがね…だから、オノ・ヨーコみたいなお嬢さんだったら良かったんだよ。箱入り娘だから。それでプライドがあるでしょ。女の人って大変だと思うね。男の人以上に。女の人って自分をちゃんと持ってないと生きて行くの大変だと思う。
――それで働こう、という事でアニメーションの方（東映動画）へ…
林　そう。もう駄目だからね。六年の時に、修善寺に林家の方に親戚があって、温泉だから湯治するって行ったんですけど、母はほとんど現実から逃避するというか…しょっちゅう鏡見て泣いてましたよね。
――この作品集（72年・青林堂刊「林静一作品集」）のカラーの作品（花に棲む）はお母さんの事を描かれてるんですよね。
林　うん、あれはもう私小説ね。
――林さんは「駄目だ」と言いつつもやはりお母さんは興味ある対象、ですか。
林　いや負けたな、と思ったね。この人は芸術家だな、と。それがいいのか悪いのか判らないけど、一人だったらプライドがあるから芸術家だ何だ、てなっちゃうけど、この人がいるから……。
――勝てない、と。
林　そうそう。この人は芸術家だ、と。書をやってても何してても「食べる」って事考えて無いわけでしょ。ほとんど考えてないもんね（笑）。
――で、アニメーターになったというのは…。
林　デザイン学校を卒業したけど就職口がなくて、たまたま新聞に東映動画のアニメーター募集記事が載っていて受けたわけです。でも子供の頃からディズニー映画だけは一本ももらさず見せたんだろうかって、ずーっと不思議だったんですよ。それがある日、母が言った言葉で謎が解けた。それは、ウォルト・ディズニーが母のおじいちゃんに似てる、というわけ。写真見せてもらったらまあ口髭生やしてね、でもスキーやってるとこでロングだから分からないわけよね。で、こないだ叔父さんと呑んだ時に「ウォルト・ディズニーに似てるの？」って聞いたら、「いやあディズニーというよりは笠智衆だな」って（笑）。
――当時ディズニーというと、僕らの頃はTVで「ディズニー劇場」ってやってたけど、映画ですよね。
林　うん、「バンビ」が武蔵野館でやってて、今は中入っちゃってるけど昔は一軒ドーンとね、あそこに僕が朝一番で並んで、結局見れたの最終ですよ。それで今度中入っても人が一杯で見れないんだよ。母はこう僕を抱き抱えて見せようとするんだけど、女の力じゃ持ち上がんないでしょ。「子供がいます！見せてください！」って、俺もう恥ずかしくって（笑）。
――でもお母さん本当にいいお母さんですよねえ。
林　結局アニメーション行った、てのもそうなんだよね、ディズニーの映画だけはきちんと全部母が見せたもんね。
――あの頃ディズニーの映画っていうとやっぱり驚異的なものでしたよね。子供が見たら本当にねえ。…で、そういうのが漫画の中（「まっかっかロック」）に出てくるディズニーの…
林　そうなんだよ無意識に出てきちゃうんだよね。
――あれ無意識ですか？（笑）
林　犯されてるよね、ディズニーに（笑）。

■十二社「星アパート」

――結婚されたのは…

林　二十…七かな。
――その時はお母さんも一緒に住まれたんですか。
林　うん、最初は別々だったんですよ。というか、もしかしたら一人にしたら大丈夫なんじゃないか、って思ったんですよ。この人はね。段々ベターッとしてくるでしょ。むしろポン、と突き放したら一人で生きて行く人なのかも知れない、って。で（赤瀬川）原平さんなんかも知ってるけど、一時離れて暮らしたことがあるのね。十二社にある「星アパート」ってところに、つげさんの後に入ったんですよね。つげさんのところへ奥さんのマキさんが来てて。行くと、つげさんが「居るんだよ」って（笑）。
――林さんはそこでは一人で。
林　うん、あそこを紹介したのが石子（順造）さんなんだよね、評論家の。あそこのアパートの奥さんは凄くいい大家さんで、いや、悪い人かね（笑）、女の人入れたがらないの（笑）。男の独身を居れたがるの。つげさんも最初は独身だったから良かったんだけど、マキさんが入ってきたんで（笑）。…何でいいか、っていうと僕がいない間に部屋に入って洗濯物持ってって洗濯しちゃうの、下で。
――えぇーっ？いくつくらいの人だったんですか。
林　いや結構な年だったんじゃないかな。
――未亡人。
林　いや旦那が居たよちゃんと（笑）。でも若い子しか入れたがらないの（笑）。ダーッ、と。

現在の十二社の『星アパート』

「たしかこの辺の部屋だったなあ……」

PHOTO BY JUN YAMANAKA

――ハーレムみたい（笑）。林さんもてたんでしょうね。
林　もてないもてない（笑）。でね、母は一人で大丈夫だな、って思ってたら、お袋毎日その大家さんに電話入れてたんだって。で大家さんが「あなたね、息子さんもいい年なんだから」って、あなたも自分をなんたらこうたら、って毎日喧嘩してたんだって（笑）。そういう話を石子さんとしてたらね、石子さんが「つげはねえ」って話になって（笑）、つげさんのファンが電話すると皆大家さんが断るわけ。「つげは今外出してます」って（笑）。下で切り替えになってるんですよ、電話が。で各部屋に行くようになってるのね。
――つげさんもてたんですねえ。
林　そう。だからマキさんが強行突破、というか住んじゃった、というのは正解だったね。だって電話なんてしなくても直接部屋入っちゃえばねえ（笑）。
――なるほど…。その建物はもうないですよねえ。
林　うん…僕が七十年代の初めに紀伊國屋で個展をやった時に来て下さって、「まあまあこんなとこで個展を開かれるほどお偉くなって」って頭さげてた（笑）。そしてその後七十五年頃そろそろこのアパートも古くなったから立て替えたいと思うんだけど、どういうのがいいか、って電話がかかってきたの。僕は十畳くらいの板敷きのフロアで絵が描けるようなところがいい、って言ったらね、「そしたらあなた戻ってきてくれる？」って言うの（笑）。あそこ訪ねてみたいですねえ。

林静一の絵を感心して見ていた二十数年前

佐々木マキ

もう四半世紀前になるんだね、林静一さんの作品が「ガロ」に登場してから。うまい人がいるもんだと思ったよ。まず絵がうまい。それまでも絵のうまいマンガ家は沢山いたけれど、彼らは既成の流儀というかスタイル、それに則った上でのうまさであってね。林さんの場合は、全く違う、誰とも似ていない突然変異的な（そのくせ妙に懐かしい）絵でね、実にうまいんだ。

江戸浮世絵、大正抒情画からアメリカン・コミックス、アンリ・ルッソー（いやポール・デイヴィスかな）まで取り込んで、見事に独特な自分のスタイルを創りあげているのだから、たいしたものだ。器用で勉強家、ということもあるのだろうけれど、やはり抜群の絵のうまさがあればこそだな。

ぼくなんか、同時期にマンガを描いていて敵わないなと思ったことの一つに、空間の扱いのうまさがあるね。描き込むところは、とても丁寧に描き込むかと思うと、ポーンと何も描かない白地を残す。このバランス感覚が絶妙なんですよ。めりはりが利いてて。特にスミベタの部分との対比において、この白地が実に絶妙なんだな。

その頃のぼくは、コマの中に空地がある限りそこに何かを描き込まないでいられない空間恐怖症だったから（それはそれでおもしろい効果が出ていたと自負しているけれど）林さんの何も描かない空間は驚異だったな。たとえば『花ちる町』の最終ページ、背景の一切ない空間に人物たちだけが＜浮かんでいる＞のは、静かな戦慄を覚えさせる見事なラストだった。

林さんのマンガといえば例の＜挿入歌＞、あれもうまかったなあ。ああいう感覚は、それまでのマンガには全くなかったものだからね。林静一という人が＜どこか違う世界＞からマンガの世界へやって来た人だということがよく解るね。『まっかっかロック』で、デル・シャノンの「悲しき街角」の鳴り響くコマなんか忘れられないな。

林さんとぼくは同時に「ガロ」に出てきたものだから、初めのうちは二人こみでマスコミに取り上げられることが、たまにあったんだよ。＜解らないマンガ＞とかいわれて。

ぼくのマンガはむちゃくちゃだけど、林さんのは、ご存知のように、決して解らないマンガではない。ただ、イメージの提出の仕方やコマとコマとの繋がりが、斬新で独特なだけで。見る方もセンスを要求される、そういうマンガだったんだね。

二人こみで話題になったからといって、ぼくは林さんをライヴァルと思ったことは一度もないですよ。林さんもそう考えてなかったと思うな。ビールとワインぐらい違ってたからね。ビールがワインに劣等感を抱いたり、スプーンがフォークに優越感を持ったりするのは愚かしいことだよ。でも、林さんが描き続けてくれてたのが、飽きっぽいぼくにとっては、ずいぶん励みになったのは確かだ。

——そこ行きましょう（笑）。そこにはいくつくらいまでいらしたんですか。

林　結婚するまでだから…二十六までかな。だから二年くらいかな、母と離れてたのは。

■「裏なんかなかった」

——非常に大雑把な話ですけど、林さんは当時…学生運動とか華々しき頃ですけど、左翼的な意識とかはあったんですか。

林　それはなかったよね。（佐々木）マキさんとの対談でも割りと…ただ今以上に左翼的な考えは世の中に充満してたよね。だから元気なんだよね。「反抗するのが元気」ね。

——当時、新聞なんかには『ガロ』も「代々木系」に好まれた、なんて書いてあるんですよね。

林　そうそう、白土さんがそうでしょ。だから僕なんかもビクビクしてたのは、夢に見たんだけど、千駄ヶ谷の銀杏並木のところを歩いてると赤い旗立てたトラックが止まるんだよね。で皆戦闘服着てて、「お前は—！」なんて言われるんだよね（笑）。で、何かアパートみたいなところへ連れていかれるのよ、こんな細い階段あがって。それで明りをバッ、と当てられて「お前はこんな漫画描いていいのか！」なんてね。夢よ、これは（笑）。

——当時佐々木マキさんが新聞でインタビューされてるのを読むと、白土三平さんの作品はあれはもう前の時代で終わったんだ、と。

林　あいつそんな事言ってんのね（笑）。

——これからは僕らの時代だ、なんて言われてるんですよね。で、けっこう当時佐々木マキさんと林さんて当時ペアで見られたような…。あの頃まだ『ガロ』で『カムイ伝』連載してるんですもんね。

林　そうそう。だからけっこうボロクソに言われてるでしょ。「あいつらのをやめさせろ」とかね（笑）。だから京都での講演か何かで、マキさんと僕と勝又さんと居て…勝又さんはいいのよ、いい子いい子、ってされて（笑）。あいつは白土さんの弟子みたいな感じでいたよ。弟子じゃないのに（笑）。それでシカトされちゃうの、僕とかマキさんは。で、勝又さんに白土さんは今どうしてますか、とか質問が行くわけ。京都書院のティーチ・インなんかでね。でマキさんのファンなんかは隅の方に居るんだよね。で「もう時間がありませんからそろそろ終りにしたいと思います」て京都書院の人が言うと、今まで我慢してたのが「ハイ」なんて手を挙げて「マキさんはああいう漫画描いてますけど、マキさんの彼女ってああいう顔してるんですか」なんてさあ（笑）、下らない質問する訳よね（笑）。そうするとさぁ、前の方に陣取ってるそういう思想的な事を問わなければいけない、って奴らがくっだらねえ質問しやがって、て顔するわけよ（笑）。

——そういう意味じゃその辺から嵐山さんなんかが登場するあたりから大々的に反響ってのを誌面に展開しちゃいますけど…。ありきたりな言い方なんですけど、当時例えば学生運動、全学

連もそうだけどファッションの一部だった、という言い方がありますよね。例えばスローガン見てても右も左もないスローガンですよね。で皆東映ヤクザ路線の映画とか見ててねえ。

林　うん、だからそうなんだよね。もう一回きちんと見直すとすごく変な。

——変ですよねえ。だからそういう事は中であういう漫画描いてるという事はかなり勇気のいる事ですよね。あんなバタ臭いリベラルな漫画をねえ。じゃあ実際はその頃はそういう左翼的な思想というか雰囲気というか、そういうものに浮かれてた人からは支持されなかった。

林　そうだよね。でも全学連なんかでもポスター書いてくれ、なんてのもあったから同世代的な「感覚」ってのはあったんだろうね。だからマキさんたちなんかはシラケっていうのでもないんだけど、マジにならないで、こうワーワーやる、というか。

——そうムキにならないで、というような。

林　そうそうそう。

——「ガロ曼陀羅」（TBSブリタニカ刊・ガロマニア必見の著）でも書いてましたよね、ガロに描き出したとたんにマスコミに引っ張り出されて当時の若者の代表みたいになっちゃった、と。

林　もう今流行になった人と同じですよ。どこで生まれて何でどうで、こういう現象についてどう思いますか、今世の中こういうあれですけどあなたのはちょっと違いますね、そういうのはどう思いますか、って。

——その時林さんが描いてた作品でも、裏があるものじゃないですよね。

林　無いよね。

——それでもどんどん深読みしますよね、回りは。

林　今の方が深読みするんじゃない。昔の見て。「あ、そう繋がるか」とかね。

——むしろ当時、いろいろな理屈こねて思想めいた事を言ってる連中に対して、裏なんかお前らにも無いだろう、時代に裏なんか無いんだ、というのを作品を通して描かれていた、というか。

林　マキなんかはそうだよね。僕なんかはどっちかというと、逆にあの当時は深読みする対象じゃない、というか、白土さんなんかだと一生懸命読んで評論書いていいけど、こいつらのは書いたってしょうがないよ、っていうね（笑）。

——その頃は音楽的にはビートルズ。マキさんはもろ、ですけど。

林　うんマキさんなんかはそう言ってたね。僕も見てたんだけどね、「ヤァヤァヤァ」「ヘルプ！」とかね。「ヘルプ！」はリチャード・レスターだから面白いし。でもそれはビートルズだから面白いんじゃなくてね、マキはそうだったけど。リチャード・レスターっていう監督が面白くてね。ナンセンスっていうかああいう作り方が。それは七十年代の後半に若者が「モンティ・パイソン」が面白い、って言うのと同じなんだよね。要するに無意味でナンセンスなギャグをやる、っていうね（笑）。

■思潮社「現代詩手帖」1970年2月号

■石子さんは「ヘリコプター」

——当時よくつるんでらしたのは…。

林　上野さん、石子さんとはよく遊んだね。

——理屈っぽい人たちと（笑）。

林　そうね（笑）。石子さんなんか朝から晩まで理屈言ってんのよ（笑）。凄く憶えてるのは青林堂に遠山さんって女の子がいてね、で彼女と二人で喫茶店で…誰待ってたんだろ、やっぱりガロ系の人待ってたんだな。で二人でセックスの話してたんだ。そこへ石子さんが入ってきてね、ドカッて座って二人が話してるのを聞いてね…セックスって言っても僕らが話してるのは男と女の話をしてたわけ。性でも女の問題とか、社会的にこうだとかね。そしたら石子さんが「お前ら馬鹿だな、セックスってのは（頭を指差して）ここだよ、ここでするもんだ」って（笑）言うからさ。違う話してるのに（笑）。

——性でも「ジェンダー」の方の話なのに（笑）。

林　そう（笑）。「ここだよ」って。東大卒ってのにすごい軽蔑されて（笑）。「えっ？判らない？性ってのはここなの」って、あれがもう印象的なの（笑）。

——理論派の人だったんだ。

林　僕は…合理的な人だと思ったけどなあ。だから赤瀬川さんたちは石子さんたちの論理はヘリコプター主義だ、って。そしたら赤ちゃんのやってる事は、路上観察なんか今でもやってるけど、石子さんもそういうとこはうまくてね、パッ、とその人の「タチ」っていうかね、運動の本質を見抜くんだよね。だから「原平たちのやってる事はうじうじうじうじ麓から頂上まで路地歩きながらあ、これ面白いこれも面白いなんてね、頂上行きたいんだろ？だったら俺たちはヘリコプターで上行く」って言うの（笑）。そうしたら原平さんは「そうじゃなくてうろうろするのが面白い」って

PHOTO&COLLAGED BY JUN YAMANAKA

（笑）。だから石子さんの著書にね、つげさんやいろんな人が石子さんの似顔絵を描いたのね、そしたら原平さんのは石子さんの歯が、イヤミみたいにグーッと出てて、その頭にヘリコプターのあれがついてるわけ（笑）。石子さん「こりゃあないよなあ〜、いくら何でも」って（笑）。

■ひっくり返った男と女

――先程からの話で、林さんというと例えばお母さんからは人生の上で、作品でもモチーフも女性が圧倒的ですし、やはり「女性」というものから多大な影響を受けてられますよね。

林　いやこれはね、もうちょっと年取ってからやろうと思ってるんだけど、男と女がひっくり返っているのは森進一と、クールファイブもひっくり返ってるんだけどね、歌謡曲でいうと六十年代後半と七十年代、あそこしかないのよね。あの前も後もきちんと戻るのよ。男は男の歌を唄うし、女は女の歌を唄う。でも、あそこの時期はひっくり返る。

――男が「わたし…」と唄う。

林　そう、森進一が。

――その歌を作ってるのがまた男なんですよね。

林　そうね。で、なぜあそこでひっくり返ったか、というのが日本でね、ちょっと興味深い事でもあるんだよね。だから歌謡史でもあるんだけど、もうちょっと…ね。だから過渡期なんだよね。映画も皆そうなんだけど、「弱い女性」って事に荷担していく部分がすごく多い時期なのね。今は「荷担しよう」にも「荷担してよ」ってのが多いわけでしょ（笑）、男性にはね。

――（笑）六十…何年くらいですかね。

林　森進一が出たのが青江美奈と同じで、「恍惚のブルース」が…僕が二十歳の頃じゃないかな。

――というと六十五年頃。ちょうど高度経済成長に入った頃（笑）から反対になり始める訳ですか。

林　そうね。ひっくり返るのね、森進一が出て来て。

――「夜のヒットスタジオ」が始まった頃かな。

林　うん。で、森進一の声ってアダモに近いんだよね。中性的な。

――初めは「悪声だ」って言われたんですよね。

林　そうそう。でも、その後ダダダダッ、とスターになってったでしょ。で、唄ってるのは女の歌なんだよね。

――それに対して林さんはこだわりがある、という。

林　「何であそこでひっくり返ったんだろう」っていうね。

――林さんなりのお考えではどういう理由だと思いますか。

林　いろいろ考えられるけど、森進一が出てきた時代に言われてたのが、大正時代に似ているって、時代状況が。確か、テルアビブ空港で捕まった岡本某が警察の調べに対して、大正時代のテロリストの名前を出していたんだよね。僕も『紅犯花』で、昭和歌謡から大正の童謡まで遡って描くんだけど、大正、あの時代に有るんだ。男と女がクロスする状況が。ユニ・セックスっていうかな、男で

も女でも無い感覚が。それがもう一度、戦後になって繰り返されたって事です。それが何かと言えば、女性からの波というか、女性の意識革命の動きがあった事は間違いないし、戦後アメリカン・デモクラシーで、江戸から明治に至る動きと似た状況があったと考えれば、その次に来るのが大正と似た状況だよね。だから、明治、大正、昭和ってのは、日本人の近代化のパターンだと言えるのかも知れないね。平成は、何だろうね。

――歌謡曲は随分聞き込まれたんですね。「ガロ」の林さんの特集号（七〇年二月増刊号）でも、高野（慎三）さんのインタビューで「好きな歌謡曲を挙げてよ」って言われたらズラズラ〜ッ、と曲名が出てきてましたよね。

林　そうそう。あの頃は、歌謡曲から入ってったところがあるよね。やっぱりビートルズがいくらI・My・Meで唄おうと、ちょっと違うんだよね。届かないんだよね。ところが歌謡曲だと届いてくれるというか、「ここが痒い〜」（笑）ってところにね。そういう詩がぞろぞろ出てくるわけよ。あの頃の詩ってどこか変なんだよね。山口洋子でも「ああ堕ちてくわたし」とかね（笑）。おかしいよこれ、って。目茶苦茶なの（笑）。その目茶苦茶を支持したりしてね。山本リンダが「どうにもとまらない」って出てきたりね（笑）。「ああ、コレ凄い！」とか言って。あの頃やっぱり破天荒だよね、ああいう踊りにしても。

――「逆転」という事だと、井上陽水とかそうですよね。

林　「私の愛した人は」とか言うんだ

PHOTO&COLLAGED BY JUN YAMANAKA

よね。何かこう「せつない女心」を唄ったりするんだよね。だからあがた森魚もそうだし。井上陽水なんかは最初、七二年頃の平凡社の特集か何かで嵐山の弟子の誰だったかな、それに「お前こそ軟弱だ」（笑）って言われてた。「お前何でそんな軟弱な歌唄うんだ」って（笑）。

■フォークが演歌になった

――その頃は高度経済成長で男は家庭内では不在になる訳ですよね。しかし一方会社人間で、仕事ではむしろ「男」が燃えていた。つまり今よりよほど「男」がはっきりしていた時代ですよね、「家長」「父権」なんて言葉もあって。男の社会の方が膨れていって溺れてきて、だから女の言葉を使って表現した。ところが今は女の人が強いから、逆にあの、吉田栄作みたいな（笑）クサい直線的な「男っぽさ」を唄ってるんじゃないか。

林　そう言えるかもしれないね。その後、五木ひろしと小柳ルミ子が出て来た。五木ひろしの山口洋子の詩は「横浜、たそがれ、ホテルの小部屋」って凄いでしょ、あれ（笑）。単語並べただけで、繋がってないようで繋がってる。小柳ルミ子は「格子戸を、くぐりぬけ」でブツッ、ブツッ、と切ってね、もうあれはメロディーなんかも「童謡」なんだよね。五木にしても。国定教科書の世界（笑）ね。

――ああ、「千曲川」なんかはそうですよね。あの頃からですか、「国民的歌手」なんて言葉が出てきたのは（笑）。

林　そうそう。だから、森進一のような非常に個人的なメッセージは終わったな。

――もう一度「青い山脈」に戻されたんですね。

林　そう。で、森進一が届かない部分というのはフォークの方に流れてくんだよね、吉田拓郎とか、「浴衣の君はすきのかんざし」とかね。他にもほら、手紙に涙の染みがついてたら「わかって下さい」（笑）とかね。それでもうほとんどさだまさしの「精霊流し」に行くでしょ。だからフォークが「歌謡曲」なんだよね。

――そうか、だから今「歌謡曲が駄目になった」とか言われてますけど、そうじゃなくて、今流行っている「ロック」が「歌謡曲」なんですよね。詩なんかみても。あれも演歌なんですよ。

林　そうなんだよね。

――演奏形態が「バンド」って形取ってますけど、今流行ってるものの唄ってる内容なんて「演歌」ですよね。だから全然「歌謡曲」は駄目になんかなってない。

林　そうだよね。

――昔の「アリス」から、今流行ってる「チャゲアス」なんかもあれ演歌ですよねえ。

林　そうそう（笑）。確かにね、あがた森魚が出てきた時ね、『赤色エレジー』で。あの時「あれはフォークじゃない、演歌だ」っていう論争があったのよ（笑）。

――岡林信康も「自分の歌は演歌だ」って、自分で言っちゃってる（笑）。

林　そう（笑）、そうだよねえ、あれ。「フォークの神様」って言われてるのに自分で「演歌だ」って言っちゃってるの（笑）。その生きた臨床例（笑）ってのが堀内孝雄（笑）。あの人なんか今演歌歌手の「ドル箱」になっちゃってるんだから。だから谷村新司も、元「アリス」の二人はもう完全な演歌歌手ね。（笑）。東南アジアで大ウケしちゃってるの。東南アジア旅行すると、どこ行っても「『昴』唄ってくれ」って言われるんだよね（笑）。サビのとこしか憶えてないからちゃんと憶えとけば良かった、と思って（笑）。

林　（笑）でもね、今「サビ」って言ったけど、カラオケでキツクなってくるでしょ、若い人の歌が。で演歌なら楽勝かな、と思ったら結構難しいんだよね（笑）。サビのところなんか。感情入れないといかないから。…演歌はよく「女々しい」とか言われるけど、八代亜紀なんかの「涙の雨が降る」って詩があるでしょ、あれなんかほとんどシュールリアリズムの世界だよね（笑）。「涙の雨」なんてさ、凄いじゃない。だからあの頃はそういうのを面白がってたんだよね、きっと。

――八代亜紀はいいですよね。

林　都はるみなんかはさ、皆でワーッと行って紙テープなんか投げて見てもいいんだけどさ、八代亜紀は一人で行ってね（笑）、「ヤシローッ」なんてやってみたいよね（笑）。

――孤独な長距離トラックの運転手が後ろに貼るポスターで一番多いのが八代亜紀だってよく言われましたもんね。…林さんはやっぱり歌というとメロディーよりも「詩」が来るんですか。

林　うーん…、そうだね、詩が面白いよね。全部言葉ですよね、戻るとね。メロディーを一生懸命追いかけてる人も若手でいるけど、僕は詩がスッ、と入ってくるからね。

■月刊ガロ1970年2月増刊号『林静一特集』

勇気のあるベタ

ひさうちみちお

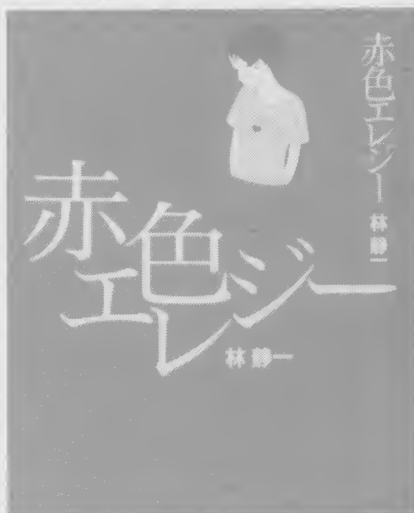
僕が最初にガロを初めて知った時それまで見ていたマンガと全然違うと思ったのは作品のテーマもだけど何より絵が違うと思った。それを作家で言えば林静一さんと佐々木マキさんです。気軽に「さん」なんて書くのはちょっとマズイと思うくらい今でも強烈にあこがれてる。ガロを知ってそれからは当然ガロを見ながらマネして自分も描くようになったけど僕は専ら佐々木マキさんのマネをしていた。林静一さんの絵はマネしようと思っても出来ないくらい自分の実力とは差があったからだ。無論佐々木マキさんもとてもマネしようにも出来ないくらいレベルもセンスもかけ離れてたけど絵の雰囲気とゆうか、そおゆうものがまだ自分で佐々木マキさんの世界に近いと思ったのでそうしただけだった。

「巨大な魚」や「赤とんぼ」ですごくぶっ飛んだ。それとやっぱり「赤色エレジー」を1ページ10分くらいかけてシゲシゲと見つめながら読んだ。僕が一番すごいなあと思ったのは陰の使いかただった。その独特のリアリティーがテーマを雄弁に語って単行本で一冊読み終えた時は玉手箱みたいに一、二年過ぎたような気がした。CMでの細い線を使った女の人もすごくリアルなきれいさを持っていると思って感心してしまうのだけど僕はやっぱり大胆に黒くぬり潰された陰が好きだ。だから時々は真似して、陰でアピール出来るような絵を描こうとしたこともあったけれどこれはものすごく勇気の要ることだと思う。僕は何か資料の写真がある時でないと大胆にバーッとぬり潰すことが出来ない。陰の使いかたがちゃんと分ってないから自信がないのだろう。林静一さんの絵を見るたびに僕は自分なんかもっともっといろんな絵や写真や現実を見て勉強(自分に刺激を与えるために)しなければいけないなあと思うのだがやっぱりなまけてしまう。マーこのへんが自分のウツワだからとも考えるのではありますが。

PHOTO BY JUN YAMANAKA

現在の『ローレル』

■小学館刊『赤色エレジー』。
『赤色エレジー』全話収録。他に
『アグマと息子と食えない魂』、
『吾が母は』、『赤とんぼ』、
『山姥子守歌』、『花ちる町』、
『桜色の心』を収録。定価1200円。

■自由国民社『ラブ・ゼネレーション』
GS「ジャックス」のリーダー、
早川義夫著

■『赤色エレジー』、女性、母性…

――あがたさんが『赤色エレジー』を歌を唄いたい、って持って来たんですよね、喫茶店かどこかで。そこら辺の下りというと…何か衆人環境で唄われちゃった、という（笑）。

林　そう、新宿三越裏の「ローレル」っていう喫茶店でね。あの、店は三階まであるのかな？上の階にゆくと人もいなくて、のんびりするのには良かった。原平さんとか待ち合わせるのにね。伸坊なんか美学校の生徒で、一升酒を持ち込んでお冷やのコップで飲んでいたね。あがたさんと会った日は結構混んでいてね、そこでギターを出して歌うんだもの。

――あがたさんは『赤色エレジー』までは割りと無名でしたよね、その前に早川義夫さんなんかと一緒にやってたりとかしたみたいですけど。で、「『赤色エレジー』作ったんで聞いて下さい」って言われて、目の前で弾かれたんですか。

林　うん、うん。恥ずかしいですよ（笑）。やっぱりさ、目の前だと楽器だからさ、ジャカジャカ鳴るじゃない（笑）。テープか何か渡してくれりゃいいのに、って（笑）。「聞いて下さい」って言われてもさあ（笑）、「♬愛は～愛とて～」ってジャンジャカさあ、あんな恥ずかしいの初めて（笑）。

――さっき「歌詞に引かれる」という事でしたけど、あがたさんのあの「愛は愛とて」という下りはどうだったんですか。

林　うーん、あがたさんのはラブ・ソングとして聞けるよね。僕が『赤色エレジー』に描いたのは同棲という男女のつながり方だよね。結婚では勿論ない。それよりも自由な関係で、石川達三さんの『自由な関係』ていう小説かな、題名を忘れてしまったのだけれども、あの小説はお互いに名乗らず、ホテルで性的関係だけを続ける男女の話なんですよ。ちょっと『ナイン・ハーフ』に似た自由な関係なんですが、その関係が壊れるのが女性に子供が出来てしまうのね。そこが僕がずっと見てるとこなんだ。『pH…』（4・5グッピーは死なない／小社刊）でもそうなんだけど。

――男性中心になってるわけですか。

林　いやそうじゃなくて、一人の男が一人の女の人を愛する、それがたまたま「同棲」という形を取った、という風にたぶん読むんだろうね。そうじゃなくて僕の場合は「同棲」という形態しかなくて、「結婚」でもないし。けっこう意識的なんだよね。「結婚制度」に対してね。

――なるほど。「制度」に対して。同棲だって夫婦と同じ事をしてるわけですもんね。

林　そう。

――じゃあ独占という、そういうものを想定してるんじゃなくて、むしろフリーセックスに方に近かったりして（笑）。

林　（笑）でね、あがたさんのはそういうまだ男女の「生」なそういうところに直面してないだけ、女の人を好きになって同棲して、それでたぶん結婚するんだろうな、という仮定の中で唄われてい

るという気がするんだよね。

——…でもお話を聞いてると、「…グッピー」まで一貫して繋がるものがあるんですね。

林　うん、…でもやっぱり母親だと思いますよ。母親があゝいう形でグーッと来るでしょ、自分はそうすると重いんですよ。血縁とかそういうものがね。だからカッコーみたいにね、卵生んだら他にポン、と預けちゃって、「育ててよ」とかね(笑)。でも切れないでしょ、「親子」って関係は。

——そしたら上村(一夫)さんの(「同棲時代」)とは決定的に違いますよね。やはり上村さんのは日本にある伝統的な男女の世界ですよね、でも林さんのはもっと一対一のしがらみ一切無し、という…。似て非なるものなんだなあ。

林　それが「少女」と繋がるんだよね。石女っていうか、「母親にならない」という点で。だから石子さんが夢二を書いて、夢二というのははぐれてる、昭和になって、どんどん女性誌の女ってのは「皇国の母」になっていくでしょ、ところが夢二の女はフラフラしていてその辺で野垂れ死に(笑)する女なのね。子供産まないし。

——林さんは逆の部分を描いているのに、ファンは「男女の愛情」とかそういう部分で好きになるのが多かったりして、面白いですよね。…こうやってお話聞いてますと、お母さんは立派な方ですよね。しっかり美学をお持ちで。一対一ではかなわないわけでしょ。人間として、というか。

1970〜71年月刊ガロ連載
『赤色エレジー』より

林　かなわないねえ。

——そうすると「母性」とは違いますよね。もう母性を飛び越えてる。

林　うん、だからね、寺山さんのところとよく似てると思いますよ。寺山さんのお母さんもやっぱり物凄く(笑)しっかりした人でね。だから寺山さんが自分の方へすごく近付いて来た、というのがよく分るんです。お互いね、あいつのいう事は「分かる」、と。通じる、というか。そういう「密約」だよね、息子同志の。普通男親がいればその父親とのやりとり見てて、例えばその中に哀れな女を見たりとかね。でそういう父親を殺して母親を自分の元へ、そういうのがあるんだけど、母親と自分だから…どう言えばいいのかな、最初から対になってるんですよ。余計な雑音が無いから。

——林さんにとっての「母性」というのは傷を癒してもらうところじゃないですよね。

林　そうそう、いらつくところだよね(笑)。嫌になるんですよね。ストレスが溜まるところなんですよ。だから女の人に母性を発揮されると、本当は男として楽なところなんですよ。それが「ワーッ」といらつくんですよ。本当にそっけない方がいいの、女性はね。

——CMでもありますよね。「この手は一生離れない」とか。あんな事言われたら死にたくなっちゃう(笑)。あれ冗談、って言うけど。

林　ああいうところチラッと見せる

若き芸術家たちがこよなく愛した喫茶店『青蛾』。

新宿にあった当時のランタン

林 静一 好きな店

現在は東中野に場所を移すも休業中

今は亡き、画家でもあった店主・五味氏

女の怖さ、ね（笑）。

——例えばお母さんに対して、可愛く見えたりとか、そいう事はあるんですか。

林　いやもう小学六年くらいから母親がああいう風になって…だからもう自分の子供だと思ってる。母親を。なんでも相談されちゃうし。安岡章太郎かな、あの小説の母親に近いわけ。父親にすがらないで息子にすがってくるわけ。いろいろ人生の問題とか。息子は本当は自分の次の人生生きてかなきゃならないのに、いろいろ言ってくる。そういう立場に押し上げられてしまう。僕に兄弟がいたらそういう役目は分散されるんだろうけど、色んな役をやらなくちゃならない、一人で。それはもう大変ですよね。

——女性は男に何を求めるか、逆に男は女性に何を求めるかなどいろいろ難しいですが……（ひとしきり一同男女観・セックス観いろいろと盛り上がる）……男と女、という関係の話ですけれども、例えば「男女の関係」（笑）ですね、さっきからいろいろと同席者一同かまびすしいですが（笑）、一回セックスしてしまえば、後は別にそれをする事に関しては全く執着が無い、という人もいますね。もちろん行為そのもの（笑）が好きな場合もありますが。

林　…僕はやっぱりシチュエーションが好きなんだよね。

——そこまでが楽しい事ですが、そこから後のシチュエーションも好きなんでしょうか（笑）、『グッピー』なんか見てても……。

林　（笑）いやあ、でも、その相手、女性でしょ。女性がズブズブ、ズブズブ入って行くからでしょ。深く。女の人が深みに入っていくんだと思うなあ。

——まあ男でもそういう女性的な人もいますしね（笑）。

林　髪伸ばしたり？（笑）

■『劇画ブーム』去りし後…

——漫画から始めてイラストレーション、絵画の方へ行かれたというのは意図的にされたんですか。

林　いやそうでも無いんですよね。やっぱり劇画ブームがあって、七二年くらいに朝日新聞が『もう劇画ブームは終わった』ってでかく取り上げたでしょ、それを水木さんが見て「新聞社が漫画家の仕事を無くすんだ」って激怒した事があるんだけれども、それほど劇画ブームが始まるとその終焉というものはかなり新聞社としては意識的にね、かなり上層部でも一週間ぐらい協議したんでしょ。一般の新聞社がね、考えられないけどね、今漫画で「何とかブームは去った」なんてやらないと思うんだよね。だからちょうどそういう流れがあって、僕自身も一年くらい全然仕事来なかった事あったもんね。武田鉄矢が（海援隊）ブームが去って全く仕事無くなったみたいに（笑）。スパーン、て無くなるのね。

——その頃はでもかなり漫画家としても油がのってた時なのに…。

林　うん、で、まあ『夜行』に描いて…。でも『夜行』の原稿料だけじゃ食べていけないでしょ、まして結婚してたし長女も生まれてたしね。一年間全く無くて。それでちょうど一年後に電通と博

未亡人の五味幸江さんと現在の東中野の店内で

PHOTO BY JUN YAMANAKA

報堂からロッテの小梅とキリンのシリーズをやりませんか、という話が来たんだよね。だから両方ボン、と仕事始められた。ただその時その前に紀伊國屋画廊で個展やって新人賞を取ってたでしょう、だから画家の方に片足かけてたのね。それで画廊がきて「専属にならないか」という話もあったけど、例えば青木画廊は月四十万で、給料制になるんですよ。絵やらデッサンを全部画廊が持ってってね。ただ他には一切描けないし。だから唯一羅針盤があるとしたら、自由に興味がある時に興味ある対象に飛び移れるような場所にいて、売れててなおかつ自分の表現が出来る場所、っていう探し方だよね（笑）。

――絵とイラストレーションの表現としての労力の違いってありますか。

林　いやあそれは…同じだよね（笑）。だって僕は『pH…』描いてて「楽だ」と思ったもん（笑）。

――へぇ…。イラストを描いてる段階で、「あ、これは漫画にしたかったな」というものとか、その逆で漫画の一こまでこれは一つのタブローとして完成させたいな、とかそういう瞬間ってありますか？

林　うん、これは…つげさんもそうだし、滝田さんもそうだと思うし、それからマキさんもそうだろうと思うんだけれども、どこか「一枚絵」だと思うんだよね。永島慎二さんも同じだと思うんだけど、要するに漫画に対してどこに拘ってるか、というところがね。水木さんでもそうでしょ、あの一枚の藁葺き屋根のペン画なんかもあれ木版画にしたらそれで作品になっちゃう、という。だからそういう漫画の志向性っていうか、キャラクター志向じゃないんだよね。やっぱり絵画志向だろうね。じゃあ一点描きゃあ間に合うか、というと間に合わないだろうね。だからメジャーとかマイナーとか分け方があるけど、そういうのじゃない分け方がもう一つあって、ガロ系ってのはどっちかというと割合絵の方で、イラストレーションに近いスタンス、それは南伸坊が編集長になった時割合意識的だったんじゃないのかな。

――そうですね。

林　だからそういうのと、既成の漫画の「キャラクター志向」というのかな、一つのキャラクターを作って、それをどう動かして行くかというね。メジャーとかマイナーとか、「量」で分けるんじゃないもう一つの分け方があるのね。

――あと、『ばく』の表紙なんかでCG（コンピューターグラフィック）なんかもやられてますよね、それまでの「林静一」とそういうテクノロジーというものがイメージ的に合わないような気もするんですが（笑）、それはどういった感じで導入されたんですか。

林　いや、あれは要するに『ばく』の表紙もやってくれないか、という話が来て、夜久さんから。で、「絵」じゃもう駄目だ、と思ったのね。

――それは林さんの描かれた絵という事で？

林　いやそういう意味ではなくて、書店で並んだ時なんかの効果、露出度とか考えてね、例えば日比野（克彦）さんなんかの段ボールでやるようなやつでも

多分弱い、と思ったのね。でもうCGしかない、と。それぐらいガーンとやらないと駄目だ、と。あの『ばく』の世界の全く反対にいる若い人も引っ張ってくるには。CGと言ったって「お絵描き」じゃなくて、きちんと立体を作ってね、例えば動かすと陰もちゃんと変わるでしょ。

——今後林さんが絵、漫画もですけども、今現在未来に向かってこういう展開をして行きたい、というのはありますか。

林　僕今三年も放ったらかしにしている百人一首があるんだよね（笑）。今年の六月までにやらないと終りになっちゃうんだけど。二百点くらい描かなきゃならないんだよね。それは大丸ミュージアムで企画を通すか通さないか、早く絵を描かないと通らない（笑）って。

——展覧会と同時に…。

林　札とCGとビデオ発売。読み札をアトランダムに選べるわけ。取り札をまいといてCGかけとくと上の句を機械が読んでくれるわけ。画面に絵が映ってね。それをこっちが下の句の札を探すわけ。

——セットになってるんだ。

林　そうそう。

——それは面白そうですよね。…漫画に関してはどうですか。

林　僕は『pH…』なぜ描いたかというと、長井さんが八十…七年くらいかな、忘年会で「長いの一本描いてよ」って言ったのね。それが凄く困った感じだったんですよ（笑）。そしたらそれを松田哲夫なんかがいて、「そんな今誰かが描いたってガロは救えないよ」って言ったのね。とにかく長井さんの言葉が凄く気になってたから、『ばく』で途中までやって廃刊になった時にじゃあこれを描こう、って。長井さんの言った事を僕は守りましたよ、描きましたよ、って。ただ、やっぱり漫画を通して物を見てたところあったから、離れはしないよね。棒の中で漫画と絵画とか繋がっちゃってるから。だからもっと漫画は違うものが出てきていいと思うし、そこじゃないと表現出来ないものも必ず出てくるし。

——これから漫画を描く時は、内容よりも表現のスタイルをどういう風に変えて行くか、という事は…。

林　でもそれはどっちもありますよね。内容も読んでおもしろくなきゃならないし。やっぱり読んで頭の中が回転するようなものじゃないとね。

——映像もやってみたいと思いませんか？

林　やりたいですよ。うん。ただ今金がべらぼうでしょ。よほどいいスポンサーみつけないと。この間フランス映画で、三時間くらいのやつで画家とモデルの話があったでしょ、『美しき諍い女』。あ、これ凄くやりたかったテーマだ、って思ったね。ピカソの後半画家とモデルって関係になるでしょ。関係のドラマでずっと話が進んでいく。そういう意味で行くとほとんど趣味だよね（笑）。漫画が（笑）。

——じゃあ「趣味」でガロにまた発表してください（笑）。どうもありがとうございました。

■収録　一九九二年五月一日
■文責　ガロ編集部

『赤色エレジー』より

PHOTO BY JUN YAMANAKA